

地元学の実践

児島拓（千葉県佐倉市）

講師：吉本哲郎氏、横尾ともみ氏

日時：2014年6月28日（土）13:00～17:00等

【事前課題（一代記、インタビュー）】

一代記については、地元のおじいちゃんおばあちゃん1人に話を聴き、まとめるということである。昔から地域に住んでいる人がよいと考え、地域で生まれ、地域で育ち、今でも地域で暮らす人をお願いした。

結果としては、夢があった。新しいことに取り組んでいた。自分の時間をしっかりと持つようにしていた。自分の世界、自分を大事にしていた。よい人生を送っていた。お花とお茶に人が集まっていた。人は楽しいところに自然と集まるのである。話を聴いていて、非常によい気分になった。

インタビューについては、地元の人たちにインタビューをして、出会った人カードにまとめるということである。最低10人、できれば50人ということだったので、人が集まる施設で行った。可能な範囲で子どもを入れて、これまで食べておいしかったものは何か、地元で好きな場所はどこか、いままでうれしかったこと・楽しかったことは何か、これまで生きてきて大事にしてきたことは何か、地元を一言でいうと何、という5問をたずねた。

結果としては、うれしかったことは、子どもや孫に関することが多い。大事にしてきたことは、家族が多い。そのほかにも友達や友人などがある。人とのつながりを大事にしていると感じる。地元については、自然が多いということも挙げる人が多い。それがよいという人と、もっと発展してほしいという人に分かれる。

【第2回吉本氏、横尾氏講義・演習】

言うならば、事前課題の一代記、インタビューは、課題曲である。第3回の地元での地元学の実践は、自由曲である。各自が思うようにやってみてよいということである。

【第3回地元での地元学実践】

第2回で慎重計画、大胆行動とあったことから、テーマ設定を慎重に行う。候補としては、印旛沼・オランダ風車・大佐倉・本佐倉城・佐倉城・城下町・武家屋敷などを考える。その中から、大佐倉に決定する。福嶋先生や鳴子町の安部氏により、一番厳しいところに入り、そこでできれば、他でも応用可能ということに感銘を受けたためである。

大佐倉は、人口565人で、もともと少ないところ、年10人くらいのペースでさらに減少している。調査範囲は、縦約1.2キロメートル、横約0.8キロメートルで、面積

にすると約1平方キロメートルである。

地域の最寄り駅である京成本線の大佐倉駅は、乗降客数が1日平均418人である。この数は、京成線全69駅中69番目である。佐倉市の他の駅は1日平均約2万人であり、それと比べても非常に少ない。

テーマは、このような一見人数が少なく、厳しい環境に見える中で、地域のあるものを探すということである。タイトルは、京成線最後の秘境～隠された財宝を探せ～とした。

調査手法としては、生まれてからはぼぼ住み続けている70歳代の女性に1回、9年前に引っ越してきた50歳代の男性に1回という形で、違う背景を持った地域の方に水先案内人をお願いし、地域中を歩き回った。その中で、出会った人たちからも話を聴いていった。

結果として、地域は財宝にあふれていた。中世からの長い歴史や文化があり、佐倉の中心部となっている佐倉の旧城下町より古い歴史を持っている。狭い範囲にもかかわらず、寺社仏閣が数多く存在する。また、豊かな自然がある。数々の言い伝えのある木や様々な種類の野草など、里山の豊かさを感じることができる。財宝を大きくまとめると、①すでにない又はなくなりかけているけれど、残していきたいもの・語り継いでいきたいこと、②今あって残していきたい、活用していきたいもの・こと、③あまり望ましくないもの・こと、に分かれると考えた。

調べたものをどう成果物としてまとめるかについて苦慮する。成果物は、白地図を4枚つなぎあわせたものとし、調査地域を表すとともに、その周辺に財宝と考える写真を可能な限り貼りつけ、絵地図とした。そして、見た人から確実に興味を持ってもらえるよう、写真をめくったところに袋をつけ、その中におみくじを入れるという工夫をした。写真をめくると、おみくじがひけるようになっている。おみくじには、その財宝が3つのどれにあたるかが色でわかるようにしてあり、財宝たるゆえんや解説を記入してある。

【第4回水俣での発表】

実際の発表を行うにあたっては、1つ1つ写真をめくり、おみくじを引いている時間がないので、成果物の左上に一部付箋を貼り、おみくじに書いてある内容を種明かしすることにした。

気づいたこととしては、水が少ないので、人が定住しない。日当たりがよく、住宅に向いている土地であっても、畑になっている。その畑には、水道はなく、雨水を貯める水受けが置いてあることから水が貴重であることがわかる。そして、地域の様々な場所に小さな畑が多い。もともと農業をやっていた人が家の近くで、自分の食べる用、人に配る用として野菜づくりを行っている。それが、生きがいにつながり、長生きの秘訣となっているのではないか。さらに、地域のことは、地域でやっている。何かあればすぐ行政にたよるという姿勢ではない。歩きながら、地域のいたるところがきれいであったことに気づいた。地域の一斉清掃を行ったところであるということである。古きよき伝統が残る。神社の管理も、地域の人が当番で行っている。現在の地名では大佐倉でない部分も含めて行っ

ている。地域のことは地域でやるという、これからの地域のあり方を実践しているように見えた。そして何よりも、道行く中で、快く対応してくれ、家に入れてくれ、お茶まで出してくれる地域の人こそ一番の財宝ではないかと感じた。

一方、継続性が課題である。これらの財宝が本当に引き継がれるかどうか。すでにイベントや行事でも、中止しているものがあるそうである。

印象深い出来事として、最初は通行できた道路に、いつの間にか大きな木が倒れ、道をふさいでいた。そのことに気づいた水先案内人と一緒に作業をして、木を道から撤去した。少しは、地域に貢献できた気がする。